

滋賀県博物館協議会の 過去・現在・未来を語る



新撰 淡海木間撰 88 **ギフチョウ**

INFORMATION STATION 催し案内 2022 秋

MY BOOK 自費出版物の紹介

SUNRISE BOOK PRESS サンライズ出版の新刊案内

滋賀県博物館協議会 40周年記念 鼎談

滋賀県博物館協議会の 過去・現在・未来を語る

昭和57年(1982)に発足した滋賀県博物館協議会は、今年で40周年を迎えました。8月5日、MIHO MUSEUMの南レクチャーホールで行われた滋賀県の博物館・美術館とその歴史を振り返る^{てい}鼎談の様をお届けします。

(本文は鼎談の内容をもとに編集したものです)

↓左から八杉淳さん、木村至宏さん、石丸正運さん



取材／編集部 写真／辻村耕司

滋賀県博物館協議会

滋賀県内の博物館施設(美術館・資料館なども含む)相互の連絡を図り、博物館活動を通じて県民文化の振興に寄与するために、公私の別・規模・分野などさまざまな特色ある博物館がその社会的使命の達成のために協力することを目指し、昭和57年(1982)に発足。

加盟館から選出された「研修委員会」「広報委員会」「記念事業委員会」を中心に活動し、毎年、研修会(新館見学会・シンポジウム)を開催するとともに、広報誌「しが県博協だより」を発行(現在はPDF版のみ)。

加盟館数 69館(2022年4月現在)

事務局 草津市立草津宿街道交流館

〒525-0034 草津市草津三丁目10-4

TEL 077 (567) 0030 FAX 077 (567) 0031

←公式ウェブサイト <https://sam.shiga.jp>

加盟館の紹介とお知らせをご覧ください。



八杉（進行） 滋賀県博物館協議会は昭和57年（1982）に設立され、今年度で40周年を迎えました。この節目にあたり、記念事業委員会が、当協議会の歩みを振り返り、今後どう発展させていくかを考えるこの鼎談を企画してくれました。

まず、滋賀県の博物館の事始めという、大正10年（1921）に長浜の下郷共済会が鐘秀館を開館しているわけですが、

石丸 残念ながら同館は戦前に閉じてしまっている、現在につながるスタート

は、昭和23年（1948）の11月3日、第1回文化の日オープンした滋賀県立産業文化館だといえます。もともとは県庁の隣

へ昭和12年（1937）に建設された武徳殿という武道場でしたが、戦後GHQによって武道のための使用が禁止されたので、転用されたものです。館内の半分は県商工課が繊維製品や信楽焼など県の物産を展示し、半分は社会教育課が社寺などに依頼して仏像などの文化財を公開する展覧会を行うようになったんですね。

八杉 開館の翌年（1949）、

展示室と収蔵庫を区切る壁に、杉本哲郎さんが「舍利供養」という壁画をお描きになりました。その後、次に述べる琵琶湖文化館開館にあたって、別館の壁に移設され、今度は計画中の文化館の後継施設にも移設されることが決まって話題になりましたね。

ついで昭和25年には、彦根市の滋賀大学経済学部附属史料館が開館しています。**石丸** 彦根では、現在の彦根

※1 下郷共済会 長浜の実業家、下郷伝平（2代目）が設立し、困窮者の救済や学資援助、図書館や公園の整備などに取り組んだ。
※2 杉本哲郎（1899～1985） 大津市生まれの日本画家。インド古代壁画様式に影響を受けた宗教画で国際的な名声を得る。
※3 旧国宝 昭和4年（1929）に制定された国宝保存法によって指定された国宝。

天秤櫓に設けられていた井伊美術館が井伊家伝来の美術品や幕末の歴史資料を公開していました。

現在の長浜市域では、昭和28年、伊香郡七郷村（長浜市高月町）に布施美術館ができています。開設した布施巻太郎は医者で、晩年の富岡鉄斎とおつきあいがあり、鉄斎の水墨画を中心に、中世の典籍や御経類も価値の高いものを所蔵なさっています。

八杉 甲賀郡で昭和30年頃から甲賀流忍術屋敷も内部を公開するようになりました。そしていよいよ、昭和36年（1961）に県立施設として琵琶湖文化館が開館します。

石丸 先ほどの産業文化館の開設が昭和23年ですが、「文化財保護法」ができたのは昭和25年、「博物館法」が成立したのが昭和26年です。つまり、最初に産業文化館で仏教美術を公開していたころは、まだ「文化財保護法」ができていませんでした。当時の展示品は、その後、重要文化財に指定しなおされていますが、旧国宝だったもの



滋賀県博物館協議会
会長

八杉 淳さん

やすぎ・じゅん／1959年、兵庫県生まれ。草津市立草津宿街道交流館館長・草津市史跡草津宿本陣館長。



成安造形大学
名誉教授

木村至宏さん

きむら・よしひろ／1935年、滋賀県生まれ。大津市歴史博物館初代館長、成安造形大学附属近江学研究所初代所長などを歴任。県内の多くの自治体史の編纂にたずさわる。



（公財）秀明文化財団専務理事
名都美術館館長

石丸正運さん

いしまる・しょううん／1937年、富山県生まれ。滋賀県立近代美術館館長、滋賀県立琵琶湖文化館館長、彦根城博物館館長などを歴任。



↑滋賀県立産業文化館 昭和30年以降は滋賀県体育文化館として、柔道や剣道の練習・試合場となるが、平成21年に閉鎖、平成30年に解体（滋賀県立琵琶湖文化館提供）



↑滋賀県立琵琶湖文化館の別館に移設された杉本哲郎「舍利供養」写真は昭和40年ごろの様子、滋賀県立琵琶湖文化館提供）



※4 中司稔（1902～1976）大津市森の善正寺住職。小学校長を定年退職後、田上鉱物博物館を開館。

数で推移していました。

八杉 昭和56年（1981）には「びわこ国体」がありました。

石丸 スポーツだけではなく、文化の展示を博物館施設を使ってやるということで、琵琶湖文化館に近江の代表的な文化財を結集した「近江の名宝展」という展覧会が、国体の芸術部門として催されました。それがおそらく大規模かつ本格的に滋賀県の仏教美術を紹介した初の展覧会だったと思っています。

八杉 木村先生は大津におられて、琵琶湖文化館をどのように見られましたか。

木村 本格的な博物館の機能を持った施設は、琵琶湖文化館がスタートだと思います。多くの県民は自分たちの住んでいる県にはどのような優れたものがあるのかということを、琵琶湖文化館の展示を通して知った、歴史や文化に開眼したのが琵琶湖文化館によってだったと思います。

八杉 滋賀県博物館協議会は昭和57年の設立から40周年であるわけですが、実はその前にも同名の組織ができていますね。

石丸 最初は先ほどあげた布施美術館など10館ほどで、昭和44年（1969）に設立されました「右上の地図参照」。

中心になっておられたのは田上鉱物博物館の館長だった中司稔^{※4}さんで、日本博物館協会の個人会員だったことからです。ほかの府県はみな公立の一番大きな館が協議会の会長と事務局を引き受けて運営されるものなのですが、滋賀県の場合は、日本博物館協会と個人会員がつながっていたものですから、年に何回か集まって情報交換をするなどの活動はありましたが、いつの間に

がかなり多いわけです。そういう意味では、滋賀県の取り組みは早かったと思います。

八杉 琵琶湖文化館の初期に石丸先生は勤めておられますね。

石丸 私が入ったのは昭和40年（1965）です。実際のところ、最初の産業文化館はあまり人が来なかったんです。「やっぱりたくさんの方が来る施設にせにゃいかん」というので、水に浮かぶ城という外観に決まったのだらうと思います。

琵琶湖文化館はもちろん仏像などを展示していましたが、レストランもある、会堂もある、地下にはプールがある、県展などを開催する美術館の動きもある総合施設でした。何でもありだったため、本格的なものだったかという苦しい面もあったの

ですが、当時としては精いっぱいやってたと思います。

琵琶湖上に建てられたものですから、国の文化財保護委員会の指示で1日3回、主な部屋の湿度を測って報告していました。当時、付近では一番高い建物でしたから、5階の展望閣からの眺めも売りでした。まだ、ずっとかなたまで黒い瓦屋根ばかりでしたね。

八杉 企画展などの面でも、「人が来る」ことを意識なさいましたか。

石丸 そうですね。特定の予算などもなくて、限度がありましたけれど。昭和39年に名神高速道路の県内部分が全通したりして、大津への観光客も増えていった時期です。私が入って数年は年間20万人程度の来館者

か立ち消えみたいになってしまったんですね。昭和57年の再スタートは、琵琶湖文化館

自治体史編纂と民具の保存——昭和50～60年代

八杉 昭和50年代の動きとしては、県内各地域で市町村史が盛んに編纂されるようになってきます。その先駆的な取り組みが『新修大津市史』であり、最終的に平成2年（1990）の大津市歴史博物館の開館に至るわけですが、市史編さん室長から初代館長になられた木村先生のご経験をお話しいただけますか。

木村 大津市は、昭和42年（1967）に堅田町と瀬田町が編入されて、昭和40年代半ばには京阪神のベッドタウンとして人口が急増します。市内の風景も様変わりしました。昭和50年代になると、高度経済成長による変化の反省も含めて、自分たちの地域をもう一度見直そうではないかという声が市民の方々から市に寄せられるようになりました。

そして、昭和51年（1976）から『新修大津市史』の編纂が始まり、2年後の昭和53年に第1巻、最終巻の10巻が昭和62年の刊行と、丸12年かかりました。

石丸 滋賀県の人口も昭和40年代初めで85万～90万人くらいだったものが、いま140万ですね。昭和の町村合併や新住民の増加に対応した自治体史は、滋賀では『新修大津市史』が先駆けだったと思います。たくさん売れたそうですね。

木村 市民の方々の協力を得て、撮影したフィルム数は56万コマぐらい、調査した資料の数は4万点にのぼりました。その過程で、市史編さん室に寄贈されたり寄託される資料はべらばうな数になっていきまして。古文書と、明治以降の生活関係の資料に大別されますが、それらを市史編纂が終

が事務局を務め、他府県同様のかたちとなりました。

わつたらどうするかが問題となったのです。これは大津市に限ったことでなく、全国各地で起こっていました。

「市史に載つたものだけを保存して、それ以外のものは捨ててしまえ」といった極端な意見も出てきたものですから、編集委員の林屋辰三郎先生（たけやうしん）らが長期的な観点から保存公開施設である歴史博物館の建設を強く要望なさったんですね。

館がつくられる前にかんりの量の資料が集まっていたのは、博物館にとって理想的だったと思います。

石丸 同時期に大津市よりも規模の小さな自治体では、国庫補助による歴史民俗資料館の建設が進んでいます。昭和45年（1970）から始まった歴史民俗資料館整備事業といって、暮らしの変化で破棄されるようになった民具を保存・公開することを目的に、滋賀県全体で10館が誕生しました。「歴史民俗」がつく館のすべてが該当するわけではないのでややこしいのですが。その中には、高月町や野洲町のように仏像や銅鐸といった町独自の歴史遺産を打ち出した館もありました。

木村 甲賀市の資料館にうかがったさい、地場産業であつた売薬の道具などを展示なさっていたのが印象に残っています。甲賀市には、さらに売薬業に特化した「くすり学習館」が開館していますが、ああした地域のカラーを出すことができる施設は大事だと本当に思います。

※5 林屋辰三郎（1914～1998）歴史学者・文化史家。京都大学教授・京都国立博物館長などを歴任。

八杉 「秀吉の城下町」ということを打ち出して、長浜市に長浜城歴史博物館が開館したのが、昭和58年（1983）です。

石丸 昭和50年代に長浜城歴史博物館の計画が持ち上がった当時、専門家からは「いまごろ城なんて古い」という意見があつたように記憶しています。再び近年のような「お城ブーム」が訪れるとは誰も思っていなかったんですね。結果的には城の外観にしてよかったと思います。

開館からまもなく黒壁ガラス館などがオープンして県内屈指の観光地として長浜が復活する過程で、独特な一つの文化圏でもある湖北の文化遺産の継承に市民が非常に熱心に取り組んでこられたのは、天守の形をした博物館がそのシンボルとしての役割を果たしたという面もあるだろうと思うからです。木村先生は、長浜城歴史博物館協議会の委員もなさっておられましたね。

木村 長浜城歴史博物館は、滋賀県の中で全国区的な博物館の一つだと思っています。NHKの大河ドラマで秀吉やお市の方が主役を張れば、例年の3～4倍もの方が全国から長浜城歴史博物館におみえになるわけですし。

八杉 先ほどの琵琶湖文化館も外観が天守の形でしたが、安土城考古博物館、長浜城歴史博物館、彦根城博物館のように、滋賀には名称に城を冠した館が多いという特徴があります。大津の場合は、どうですか。

木村 大津市内にも、坂本城、大津城、膳所城と、たくさん城跡があるので、城関係の展覧会をするとかやはり大勢の来館があります。日本人には、郷愁を誘うののでしょうか。城のないところは、城をつくらうと言う人があるというのは聞いたぐらい（笑）。
八杉 私がいる草津宿街道交流館のように、宿場や街道をテーマとした資料館・博物館

はどうでしょうか。木村先生も「専門は街道であるわけですが。

木村 なかなか人は入らないですね（苦笑）。なるべく多くの市民の方に、実際に旧街道を歩く経験をしてもらいたいと思っ

県策定による文化施設の整備——昭和50～平成10年代

八杉 一方、県の文化政策としては、昭和

47年（1972）に策定された「文化の幹線計画」によって、県民が文化芸術にふれる機会を増やすため、美術館・博物館もふくめ、図書館やホールなどの文化施設が、昭和50年代以降、整備されていきました。

長浜、安曇川、八日市、水口、草津

の5か所に県立文化芸術会館、昭和55年（1980）に県立図書館、昭和63年に米原に文化産業交流会館、平成10年（1998）のびわ湖ホールまで続きます。

石丸 博物館・美術館では、昭和59年（1984）の県立近代美術館、平成4年（1992）の安土城考古博物館、平成8年（1996）の琵琶湖博物館まで、この計画によるものですね。

琵琶湖文化館から、近代美術館へ100点以上の近江関係の絵画が、安土城考古博物館（風土記の丘資料館）へは考古資料が、琵琶湖博物館へは魚類が移されました。

八杉 県内最大の博物館にあたる琵琶湖博物館は、まさに滋賀県の財産である琵琶湖をテーマにした館となっています。

石丸 昭和60年（1985）ごろの計画当初は、自然系と歴史系それぞれの県立博物館を建設する方針だったそうですが、2館を一つにまとめて総合博物館とした全国でも珍しい例です。研究活動も展示も、理系・文系の垣根を越えたセンスでやっておられますね。

木村 やはり琵琶湖は歴史的にも、自然史

ているのですが。あるとき「この道を歩いていくと江戸へ通じるんですよ」と言ったら、「いまの時代に、なんで江戸へ歩いていくんですか」と返ってきて。道を展覧会の目玉にするのは難しそうですね。

的に見ても、大きな存在ですね。

石丸 滋賀県の場合、中央に琵琶湖があるために、歴史遺産が一部に固まらず、わりあい県下一円に分散しているというのが特徴ともいえます。大津市のように大きな寺院があるところに集中している面もありますが、それが滋賀県の博物館・資料館の豊

かさにもなっているのではないのでしょうか。

八杉 琵琶湖の存在が滋賀県のも様性を生んだということですね。しかし、一方で、滋賀県はいろいろなところに文化財が点在しているので、交通のアクセスがよくないことが欠点だという意見も聞きます。それを逆手に取れば、各地の博物館・資料館を回ったり、文化財を見て回ること、滋賀県全域を見て回れるということにも

私立美術館の開館と市町村合併——平成

八杉 平成に入ってからの流れとしては、民間の団体や企業による館として、平成7年（1995）に観峰館、平成9年にM・H・O MUSEUM、平成10年に佐川美術館などの開館がみられました。こうした美術館の県域での役割、存在意義については、どうお考えですか。

石丸 そういう意味でも、平成23年（2011）にM・H・O MUSEUMと県立近代美術館と大津市歴史博物館による3館連携特別展「神仏います近江」は非常に印象深いものでした。近江の仏像を中心とした宗教美術というテーマで、近代美術館

つながってくると思うのですが。

石丸 江戸時代なんかであれば資料を写すのも全部筆写でしたから、必要とした人は大坂や遠くは九州へ、1週間、1か月もかけて行って帰るということが当たり前でした。電車や車も利用した滋賀県内の移動程度であれば、苦にしないような考え方もあってよいのではとも思うのですが。

木村 少し話がずれますが、博物館協議会にも近江商人関係の博物館施設がたくさん加盟なさっています。それも単に「近江商人」とひとくくりにはできず、八幡や日野、五個荘、豊郷などの商人たちが、自分たちが扱う商品は何がよいか、どうしたら売れるかを、情報収集しながら決めて、売り出していたわけです。各地域でそれぞれの特性に合ったやり方という点で、博物館の場合も同じではないかと思えますね。

八杉 来館者側としては、ある館の展示だけを見て、「近江商人」を理解することはできないわけですし、それぞれの館の側は足を運んでいただけるだけの独自性や魅力を出していく必要があると。

は中世の仏像彫刻、M・H・Oは古代インドから平安時代、大津市歴史博物館は山王祭（さんおうさい）関係を保われました。

個人的にですが、山王祭（日吉大社）に関わる神像は仏像よりも公開が難しいところ、多くの男神像や女神像を見ることができたことが印象に残っています。

本来は館ごとに会計のやり方も違うのですが、この時は会計から何から全部一本化して、やらせてもらいました。学芸員だけではなく、庶務関係の方々やその上司の皆さんも理解して対応していただけたので、成功したのだらうと思います。

協議会の存在意義からいっても、各館の展示の個性を生かしながら、一つのテーマを設定して複数の館が共催する企画展は増えてほしいですね。

八杉 公立館の立場から、MIHOMUSEUMや佐川美術館のような知名度の高い私立美術館との連携は、検討していく

必要があるかと思えます。

石丸 そうした取り組みは、一館だけで孤立することを防ぐ意味もあります。これは私立館の場合もそうだと思うのですが、遠方からいらっしゃる来館者の方に満足していただくことと同時に、所在する地域の住民の皆さんとどうつながっていくかを館は

考えなければいけないということです。

平成の出来事として忘れてならないのは市町村合併です。かつての50市町村は地域の特色を出した博物館・資料館が設けられていましたが、平成の大合併によって、複数の市町村が一つになり、市の中にいくつも館があることになってしまいました。協

滋賀県博物館協議会の加盟館

(2022年4月現在)

- 県立施設
- 市町区立施設
- 私立(個人、民間団体)施設



議会への加盟は、一つの市から一つの館だけでよいだろうというので、脱会なさった館もあります。これは、協議会、館双方にとって残念なことでした。

八杉 平成の初期、石丸先生が協議会会長になられた当時と、現在を比較してお感じになることはありますか。

石丸 平成4年（1992）ごろ、滋賀県立近代美術館の館長をしていたときに幹事館を担当していましたが、そのときに比べて、近年はいろんな事業に取り組まれて発展しておられると思います。

県立館のリニューアルとコロナ禍——令和

八杉 さらに近年の動きとしては、琵琶湖博物館が開館20年を迎えた平成28年（2016）から令和2年（2020）にかけてリニューアルオープン、県立近代美術館も昨年リニューアルオープンして「近代」の文字がなくなりました。そして、休館中の琵琶湖文化館の後継施設も、令和9年度（2027）にオープン予定です。

石丸 仮称で「新・琵琶湖文化館」と呼ばせていただきますが、現在、文化館が所蔵している国宝・重要文化財は全国的に見ても多く、1か所で多くの文化財を見せる場所にすることもできるのですが、現在は、そういう時代でもなくなりつつあります。琵琶湖文化館への県内社寺からの寄託品は、休館となった平成20年4月以降も増え続けてきました。防犯対策のためであったり、地域の過疎化により保存が難しい社寺や自治会が増えてきたためです。

それらの文化財は、できることなら寄託なさったお寺や神社など、現地の口ケーションの中で自然や建築物とともに鑑賞していただくのがベストです。時代の流れとして、そのようなかたちでないと、もうやっ

八杉 木村先生は、平成2年（1990）に開館した大津市歴史博物館の初代館長として、博物館協議会と関わってこられていかがですか。

木村 加盟館はそれぞれ、設置主体も規模も分野も、非常に異なっていますよね。ただ、現在は財政的な問題も含めて、非常に苦しい、大変な時代になっているというのは共通しているかと思っています。けれど、滋賀県全体の文化を支えている、大きな役割を担っているのは、やはり各地域にある博物館・美術館などであろうと思っています。

ていけないのではないかなと思うんです。すでに文化館では、県外もふくめた他館の企画展への出陣^{しゅん}を行っておられますが、新・文化館は収蔵庫としての機能をメインに、さまざまな施設に文化財を貸し出すあり方がよいのではないかと思います。

八杉 新・文化館がいわゆるキーステーションとなり、県内各地の文化財をめぐるといったかたちですね。

八杉 木村先生はいかがですか。

木村 難しい。

八杉 難しいですか（苦笑）。

木村 いまおっしゃったことは、お聞きするとまさにそのとおりだとも思うのですが……。滋賀県の文化を発信する新しい文化館については、「こうありたい」という意見がさまざまあります。多くの方が滋賀県を代表する施設になってほしいと期待している表れだと思っています。

八杉 令和の出来事としては、令和2年3月から世界的大流行となった新型コロナウイルス感染症の問題があります。協議会の理事会などの場でも、私立の小さな博物館・資料館はコロナ禍で来館者数が減少し、経

営も厳しいため、協議会として何か支援をという声もありました。

しかし、当協議会もそままでの財政規模があるわけではないので、結局は十分な支援もできないまま現在に至っています。

各加盟館からは、「コロナの対応なども統一してできれば」という意見が出ましたが、それぞれの設置母体の方針も優先しなければならず、ままならない状況です。

とはいえ、加盟館相互の連携なり協働は一層進めていかなければならないものと思います。最後に両先生に一言ずつお願いできますか。

石丸 博物館協議会が活動して40年とのことです。平安時代の十一面観音像などは1000年以上経っているわけですから、それから見れば、これからだと思っています。

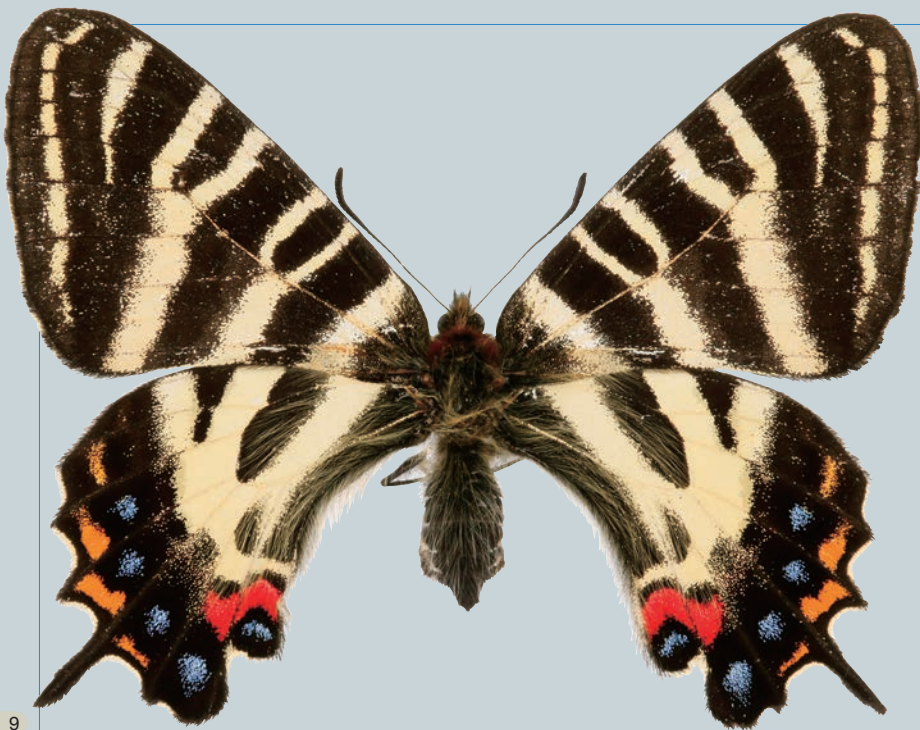
それぞれの館でのお仕事も忙しくて協議会の会合への出席も難しい面もあろうかと思いますが、「寄って知恵を絞る」というのは必要ではないかと思っています。「これをやったらもう大丈夫ですよ」という奥の手は誰も持っておりません。その都度、知恵を出して、「この館に行ってみたいな」と思っていたできるように、各館が協力していただければと思っています。

木村 特徴のある博物館・美術館がこれだけ一堂に会している県は、全国的に言ってもあまりないのではないかと思います。知識を少しでも満たしてもらえよう博物館はあるのですから、それをもっと大々的にPRしていただいで、連携しながら進んでいただければ、本当にうれしいなと思っています。

八杉 今後の変化も予想がつかませんが、協議会としてさまざまな活動を展開してまいるりたいと思います。本日はどうもありがとうございました。（2022.8.5）

ギフチョウ

琵琶湖博物館では、11月20日（日）まで第30回企画展「ギフチョウ展―近江から広がるチョウの世界―」を開催しています。この中で展示されているチョウの一つがギフチョウです。ギフチョウはアゲハチョウ科に属するチョウです。翅は黄色と黒色の縞模様で、後翅に赤紋を持つのが特徴です。里山環境の林から山地まで生



息しています。滋賀県では、4月上旬に見られます。成虫はスミレ類やカタクリなどの花に訪れ、幼虫の食草はカンアオイ類です。

本種は全国的にも減少しているチョウの一つで、環境省のレッドリストでは、絶滅危惧Ⅱ類（VU）、滋賀県レッドデータブック2020年版では絶滅危惧種に選定されています。滋賀県チョウ類分布研究会の調査では、ギフチョウは、1980年代までは滋賀県内各地に多くの産地が見られました。ところが、1998年には大津市の南部で減少します。減少理由は、本種の幼虫の食草であるカンアオイ類の生育できる自然林や若い人工林が開発によって失われたことであると言われています。

また、滋賀県西北部と東部では比較的広い範囲に分布していましたが、2005年以降に急速に減少し、2006年には多くの産地で姿を消します。減少理由は、増加したニホンジカによる吸蜜植物や幼虫の食草の食害であると考えられています。

2017年、彦根市在住の布藤美之さんから琵琶湖博物館にチョウのコレクション約2万5000点が寄贈されました。このコレクションには、今回紹介したギフチョウのほか、滋賀県レッドデータブック2020年版で絶滅危惧種に選定されているクロヒカゲモドキ、絶滅危機増大種のウラジロミドリシジミ、希少種のキバネセリ、スジグロチャバネセリなど現在では産地の少なくなつた1970年代の滋賀県産の古い標本が含まれています。これらは、滋賀県内のチョウの分布の移り変わりや自然環境の変化がわかる重要な標本であり、学術的にも非常に価値が高い標本です。

滋賀県立琵琶湖博物館 総括学芸員

八尋克郎

本展では東京国立博物館が所蔵する日本最大の銅鐸をはじめとする大岩山銅鐸を集め、これを軸にしてその前後の時代に近江の地が担ったと考えられる歴史的な役割を探ってみます。

入館料：大人900円、高大生640円、小中生420円
会期中の休館日：10月11日(火)・17日(月)・24日(月)・31日(月)、11月7日(日)・14日(月)

企画展関連博物館講座

第1回「大岩山銅鐸と弥生時代の祭祀」

10月15日(土) 13:30～15:00

講師：井上洋一氏(奈良国立博物館館長)

第2回「弥生時代後期の近江と大和」

11月5日(土) 13:30～15:00

講師：桑原久男氏(天理大学文学部教授)

会場：当館セミナールーム

参加費：各回300円(当日支払い) 定員：各70名
 お申し込み方法：往復はがきによる事前申込
 制(受付先着順、9月15日(木)から受付開始)

※事情により行事内容や日時が変更になることがあります。最新の情報を当館ホームページでご確認ください。

お問い合わせ先：TEL 0748 (46) 2424

西田天香生誕150年・杉本哲郎生誕123年記念

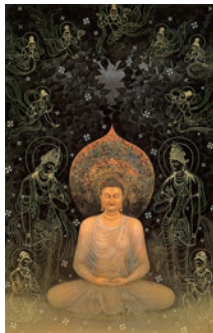
西田天香と杉本哲郎

—長浜ゆかりの偉大な思想家と芸術家—

10月29日(土)～12月11日(日)

長浜城歴史博物館・長浜市曳山博物館

今年、一燈園を開いた思想家で長浜名誉市民第1号となった西田天香(1872-1968)の生誕150年の年にあたります。これを記念し、天香と長年友好があり、宗教画家として国内外に知られる杉本哲郎(1899-



「法悦の釈尊」杉本哲郎

(新健康協会蔵)

上田道三(1908～84)は彦根に生まれ、京都や奈良で絵を学んだのち彦根に戻り、城郭や古民家などを描き続けた画家です。本展では、道三が描いた彦根の風景画を中心に、画壇で活躍した若き日の作品も展示し、その画業の全貌を紹介します。

入館料：一般500円、小中学生250円

会期中の休館日：なし

スライドトーク

10月8日(土) 14:00～(30分程度)

講師：奥田晶子(当館学芸員) 受講料：無料

講演会①「画家 上田道三の足跡

～その生涯をひもとく～」

10月15日(土) 14:00～15:30

講師：奥田晶子(当館学芸員) 受講料：400円

※当日は上田道三のご遺族にも来場いただき、お話を伺います。

講演会②「上田道三の画業

～風景画から記録画へ～」

10月29日(土) 14:00～15:30

講師：奥田晶子(当館学芸員) 受講料：100円

[以下共通]

会場：彦根城博物館講堂 定員：50名

※当日先着順、13:30より受付

お問い合わせ先：TEL 0749 (22) 6100

令和4年度秋季特別展 開館30周年記念

里帰り！日本最大の銅鐸

—太古の響きを安土の地で—

10月8日(土)～11月20日(日)

滋賀県立安土城考古博物館

野洲市大岩山から出土した合計24点の銅鐸は、後期の銅鐸多数埋納遺跡としては全国でも突出した例で、日本最大の銅鐸も含まれていました。邪馬台国が現れる直前の段階に、なぜ近江の地に大量の銅鐸が埋納されたのでしょうか。



日本最大の大岩山銅鐸 134cm
 (東京国立博物館所蔵 ColBasehttps://colbase.nich.go.jp/)

第30回企画展示

チョウ展

—近江から広がるチョウの世界—

開催中～11月20日(日)

滋賀県立琵琶湖博物館



布藤コレクション
 (滋賀県立琵琶湖博物館提供)

近年、滋賀県のチョウをとりまく環境は大きく変化しています。本展では、滋賀県のチョウの分布の移り変わりやチョウの不思議な形態や生態について、多くの実物標本をもとに紹介します。また、滋賀県最大級のチョウのコレクションである布藤コレクションを公開します。

観覧料：大人300円、高大生240円、小中学生150円 ※別途、常設展示の観覧券が必要です。

事前予約へのご協力のお願い

新型コロナウイルス感染症が収束するまでは来館には事前予約が必要です。また、感染状況により、開館状況が変更になることがあります。当館ウェブサイトで最新の状況をご確認の上、ご来館ください。

会期中の休館日：9月26日(月)、10月3日(月)・17日(月)・24日(月)・31日(月)

お問い合わせ先：TEL 077 (568) 4811

企画展

上田道三—彦根の歴史風景を描く—

10月8日(土)～11月7日(月)

彦根城博物館



「丁子屋 近藤市右衛門店図」
 上田道三筆(個人蔵)

新史料が導く桜田事変

豪商・竹川竹斎のビッグデータを読み解く

岩田澄子・田久保國子 著、大久保治男 監修
B5判並製本 総280頁 5940円(税込)

動乱の幕末、伊勢の豪商・竹川竹斎は収集した桜田事変の情報を自筆の茶書『川船の記』の中に秘匿・埋蔵した。これを天目茶碗研究の過程で発掘した編者が、現代語訳で初公開。



虚妄の影 セツボタン

Harry Doi 著

四六判並製本 総304頁 2530円(税込)

太平洋戦争から帰還した土居垣平は、混乱の日本で生き抜くことを決めた。旧知の白井夫妻の死の原因を探るうち、土居と親友の牧野は大きな闇に向き合うことに……。終戦直後の世相を背景とした長編小説。

ナイチンゲールの看護思想を求めて
看護職者として歩んだ60年を振り返る

城ヶ端初子 著

B5判並製本 総312頁 3300円(税込)

看護研修学校(教員養成課程)で求めているナイチンゲールの看護思想にめぐり合った著者が、看護師・看護教員として歩んだ60年間の振り返る。

My Book
自費出版物の紹介

引揚げと抑留の記

中西由里 編

A5判並製本 総122頁 非売品

問合先 京都市向日市寺戸町飛龍17-28(著者)

昭和18年、満州国ハルビンで結婚式をあげた父と母。母をふくむ10名の女性が綴った『帰国まで』と、戦後20年余りを経て父が綴ったソ連での抑留体験を収録。(2022.8.10刊)

わが町平田の歴史とロマンを求めて
平田物語

末森清司 著、北川司郎 編

A5判並製本 総80頁 非売品

問合先 彦根市平田町614-19(著者)

彦根在住の山城愛好家である著者が、平田山城・平田城をはじめとする彦根の山城とともに、縄文・弥生・古墳時代における平田周辺の遺跡や史跡を紹介。(2022.8刊行)



乗り鉄ときどき城巡り 巻之四

北陸東海編(前)

佐渡 滋 著

A4判並製本 総128頁 非売品

問合先 大阪府吹田市五月が丘東6-B503(著者)

北陸3県(富山・石川・福井)と静岡県を鉄道に揺られて城巡り。七尾線と七尾城跡、身延線と駿府城などを、路線ごとの豆知識コラムも交えて紹介。(2022.8.30刊)

『淡海文庫70 近江の土葬・野辺送り』
高橋繁行出版記念講演会

10月3日(月) 14:00 ~ 15:00

土葬だった頃、遺体を埋葬した場所に塔婆と四方を囲む柵(忌垣)が設けられていた長浜市余呉町坂口。小劇場「弥吉」と余呉の古い町並みの関わりなどについて、『近江の土葬・野辺送り』の著者がお話しします。

講師：高橋繁行 料金：無料 定員：30名

会場：余呉小劇場 弥吉

長浜市余呉町坂口558 TEL0749(86)3249

同会場にて 10月2日(日)~9日(日)

絵本「いぶきどうじ〜オニたんじょう」原画展 開催

10月22日(土) 13:30 ~

講師：杉本太郎氏(杉本哲郎顕彰会代表)

坂口泰章(当館学芸員)

会場：本願寺津村別院(北御堂)

Ⅱ. ゆかりの地を巡るフィールドワーク
西田天香ゆかりの地を巡る

11月20日(日)

行先：慶雲館、西田天香生家、舎那院(予定)

Ⅲ. シンポジウム「西田天香と杉本哲郎」

西田天香ゆかりの地を巡る

11月19日(土) 13:30 ~

会場：未定

内容：基調講演「西田天香と杉本哲郎」

パネルディスカッションなど

お問い合わせ先：TEL 0749 (63) 4611

(長浜城歴史博物館)

1985)と西田天香の展覧会を2人のゆかりの地・長浜で開催します。

本展では、一燈園ゆかりの名品や哲郎の代表作を通じて2人の業績をたどります。

第1会場 長浜城歴史博物館2階展示室

入館料：大人410円、小中学生200円

第2会場 曳山博物館企画展示室・伝承スタジオ

入館料：大人600円、小中学生300円

会期中の休館日：なし

Ⅰ. 西田天香・杉本哲郎連続講座

「天香さんと長浜の観光まちづくり」

10月8日(土) 13:30 ~

講師：角谷嘉則氏(桃山学院大学経済学部教授)

会場：臨湖多目的ホール

きたみどう むみょう じゃっこう
「北御堂壁画《無明と寂光》と杉本哲郎の画業」



琵琶湖博物館ブックレット16 琵琶湖の森の40万年史 花粉が語るものがたり

林 竜馬 著
A5判並製本 総112頁 1980円（税込）

樹種により形が異なる花粉は、太古の植生の証言者である。花粉化石が示す気候変動と人の営みによる植生のうつり変わりを解説。

湖国風景を描く 小田柿寿郎スケッチ集

画／小田柿寿郎

B5判並製本 総144頁 3080円（税込）

画歴50年にわたる著者の風景スケッチから厳選した230点を収録。最近の風景とともに、すでに失われた風景など多数掲載。手に取れば温かくて懐かしい郷愁に浸れる一冊。



うもれぎのや 埋木舎で培われた 井伊直弼の茶の湯

大久保治男・前田滴水 著
A5判並製本 総64頁 1540円（税込）

井伊直弼は世子になるまで過ごした埋木舎で、茶湯の一派樹立を宣言した。埋木舎当主と直弼流茶道撰草庵宗家が、屋敷と茶室、茶道具などとともに直弼茶道の真髄を解説。

伝統技術による現代的価値創造 滋賀県彦根市 井上仏壇の製品開発戦略

大橋松貴 著

A5判上製本 総192頁 3080円（税込）

彦根仏壇の工部七職のうち、仏壇の部品の検品、組立、販売を担う井上仏壇。工部の伝統技術を仏壇以外の分野に生かし製品開発してきた井上仏壇の戦略を探る。



表紙写真 (右) 長浜城歴史博物館の開館記念イベントの様子
(昭和58年4月5日、長浜城歴史博物館提供)

(中) リニューアルされた滋賀県立琵琶湖博物館のC展示室
(平成28年7月、辻村耕司撮影)

(左) 滋賀県立琵琶湖文化館の開館日。午後から一般入館が始まり、前庭にできた人だかり
(昭和36年3月20日、滋賀県立琵琶湖文化館提供)



おうみ 淡海文庫70 近江の土葬・野辺送り

高橋繁行 著
B6判並製本 総240頁 1650円（税込）

葬祭研究所を主宰する著者が、滋賀県内各地を巡り、地域ごとに特徴のある土葬や野辺送りなど吊いの風習を古老から聴き取った貴重な記録を、自らの切り絵とともに紹介。

伊吹山が見える風景

写真・文／橋本 猛

A4横変上製本 総136頁 2970円（税込）

滋賀県の最高峰である伊吹山。その春夏秋冬の姿を、湖北・湖東だけではなく、湖南・湖西からもとらえた写真100点を収録。山の花の写真10選も付す。



たけくらべ 戦国近江伝 長比

山東圭八 著
四六判並製本 総394頁 2420円（税込）

織田信長が、浅井長政が——北近江の遠藤喜右衛門、美濃の竹中半兵衛。国境を背に競った両知将が知恵比べの末に選んだのは、どちらの「長」だったのか？ 小谷落城450年に贈る、最新の研究成果も取り入れた歴史小説。

じゅうしん 70歳独居老人の京都従心案内

成田樹昭 著

B5判並製本 総218頁 1430円（税込）

孔子曰く「七十にして心の欲する所に従う」、略して「従心」。高齢者向けの京都ガイドがないことに気づいた著者が、大津の住まいから心の欲するまま京都に通い詰めてまとめたガイドブック。



Duetの定期購読をご希望の方は、下記までお申し込みください。

〒522-0004 滋賀県彦根市鳥居本町655-1
サンライズ出版株式会社 Duet編集部
TEL (0749) 22-0627 FAX (0749) 23-7720
(振替) 01080-9-61946

インターネットでDuetがお楽しみいただけます。
<http://www.sunrise-pub.co.jp/>

お申込先